

喜々 薬師 鳴渡

〔古今和歌集八離別〕源のさねがつくしへゆあみんとてまかりける時に、山ざきにて、わかレれをしみ

ける所にてよめる、

まろめ

命だに心になふ物ならば何か別のかなしからまし

〔大和物語下〕亭子のみかど、多宇とりかひのゐんにおはしましにけり、れいのごと御あそびあり、

此わたりうかれめども、あまたまいりてさぶらふ中に、聲もおもしろく、よしあるものは侍りや
ととはせ給に、うかれめばらの申やう、大江のたまぶちがむすめといふものなん、めづらしうま
いりて侍と申ければ、見させ給ふに、さまたちもきよげなりければ、あはれがり給て、うへにめ
しあげ給、そもくまことかなとはせ給ふに、とりかひといふだいを、人々によませ給ひにけ
り、仰給ふやう、玉淵はいとらうありて、歌などよくよみき、このとりかひといふだいを、よくつか
うまつりたらんにしたがひて、まことの子とおもほさんと、おほせ給ひけり、うけ給はりてす
なばち、

淺みどりかひある春にあひぬれば霞みならねどたちのぼりけり、とよむとときに、みかどの、
しりあはれがり給て、御しほたれ給ふ、人々もよくゑひたるほどにて、ゑひなきいになくす、み
かど御うちきひとかさねはかま給ふ、ありとある上達部みこたち四位五位、これにもぬぎて
とらせざらんものは、座よりたちねとのたまひければ、かたはしより上下みなかづけたれば、か
づきあまりて、ふたまばかりつみてぞをきたりける、かくてかへり給とて、南院の七郎君といふ
人有けり、それなむこのうかれめのすむあたりに、家作りてすむと聞しめして、それにのたまひ
あづけらる、かれが申さんこと、ゐんにそうせよ、ゐんよりたまはせむものも、かの七郎君がりつ
かはさん、すべてかれにわびしきめな見せそと、仰られければ、つねになんとぶらひかへりみる